

1997年6月19日

環境庁長官 石井 道子 様
文部大臣 小杉 隆 様
北海道知事 堀 達也 様

(社)北海道自然保護協会
会長 俵 浩三

十勝自然保護協会
会長 及川 裕

北海道自然保護連合
代表 稲田 孝治



大雪山国立公園の自然保護対策を強化し世界遺産とする要望書

大雪山国立公園は、日本の国立公園で最大の面積を有し、私有地をほとんど含まず、人為的影響の少ない、すぐれた自然環境に恵まれた、世界に誇り得る国立公園であります。

その国立公園の東南部、然別湖・東ヌプカウシ山周辺には、一般道道士幌然別湖線（以下、士幌高原道路という）が計画され、環境庁では未開削区間をトンネルとすることを前提に、1995年にこれを公園計画道路として位置づけ、北海道はその道路事業を執行すべく、現在、環境調査などを継続中です。

しかし最近に至り、トンネル出入口予定地が希少動物ナキウサギ生息地に含まれることが確認されました。これは、いままで北海道が主張してきた、予定地周辺はナキウサギの生息地ではないとする認識を覆す、新しい事実の発見であります（資料1参照）。

したがって下記の理由により、従来からの発想を転換し、

- ①士幌高原道路の計画を白紙撤回するとともに、
 - ②然別湖・東ヌプカウシ山周辺を国立公園特別保護地区および天然記念物に指定し、
 - ③さらに21世紀に向けたビジョンとして、日本最大の原始的自然環境を誇る大雪山国立公園全体を、世界遺産（世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約）の登録候補地とし、その登録実現に努めること
- を強く要望いたします。

記

1 トンネル出入口予定地がナキウサギ生息地として新たに確認されたこと

一般道道士幌然別湖線の未開削区間は、全線トンネルとすることにより、自然環境への影響が少ない、との認識で環境庁はこれを公園計画道路に位置づけた。しかし私たち自然保護団体は、トンネル出入口付近もナキウサギ生息地であることを従来から指摘してきた。その指摘に対して北海道は「20㍍以上離れているから影響がない」と公式に反論していた（平成8年11月5日、知事室長から十勝自然保護協会あて文書回答など）。

しかし最近に至り、帯広畜産大学助教授小野山敬一博士などの調査によって、然別湖側トンネル出入口予定地および至近距離の法面で、ナキウサギの食痕をはじめ糞および一時的貯食物が発見され、現場検証に同行した帯広土木現業所職員もその存在を確認した（資料1参照）。この法面は、古い道路構造規格による旧道道で人為的攪乱が比較的少なく、自動車の交通がほとんどないことから、ナキウサギ生息地としての環境を維持しているものと考えられる。

この新しい事実は、従来からの北海道の主張が事実認識を誤ったものであり、トンネル出入口の法面もナキウサギ生息地に含まれていることを立証するものである。

2 北海道はナキウサギ生息地周辺を「厳正に保護」する責務を有すること

北海道は「北海道自然環境保全指針」（1989）を全国の都府県に先がけて策定した。そのなかで然別湖・東ヌプカウシ山周辺のナキウサギ生息地は「全国的レベルで重要な生物とその環境」と認め、「当該自然とその環境がそのままの状態維持できるように、周辺を含めて厳正な保全を図る」（保護水準Ⅰ）方針を明記している。

しかも知事はその序文で、「道では、この指針に盛り込まれた理念や基本的な方向性を踏まえ、今後の自然環境保全施策を進めてまいりたいと考えていますので、道民の皆様の御理解と御協力をいただければ幸いです」と道民に呼びかけている。道民に対しては「指針」を守れといいながら、自らは「指針」を無視して道路を建設することは絶対に許されるべきことではない。知事が率先して当該地域を「厳正に保全」する責務を有することは明白である。

したがって後に付記する「時のアセスメント」とも関連し、士幌高原道路の計画は白紙撤回されるべきである。

3 東ヌプカウシ山周辺の「風穴地帯」は国立公園特別保護地区および天然記念物に指定されて当然の価値があること

士幌高原道路予定地一帯は標高 1,000m前後で、大雪山地域の一般的な高山帯には達しない低標高であるが、ハイマツ、コケモモ、ガンコウラン、コマクサ、など多数の高山植物が生育し、国内最大規模のナキウサギ生息地となっており、カラフトルリシジミ、マツダタカネオニグモ（新種）など希少な生物の生息地ともなっている。同時に低標高であるため、本来の亜高山帯以下の動植物も混在し、希少種と普通種を交えた、生物の多様性の一典型を示す、特異な生態系を形成している。

この特異な現象は、東ヌプカウシ山一帯を構成する安山岩の岩塊や岩屑が累積し、地下から冷風を吹き出す「累石風穴」に由来することが、近年になって判明し、また地下には永久凍土が存在する可能性の高いことが指摘されている。このような大規模な「風穴地帯」でしかもハイマツを伴うものの存在は、国内には知られていない。（佐藤謙、北海道の風穴植生概説、ひがし大雪博物館研究報告No.17、1995参照）

低標高地でありながら高山植生が出現するものとして、阿寒国立公園の硫黄山周辺は特別保護地区に指定されており、また風穴地帯としては、秋田県・長走風穴、福島県・中山風穴が国指定の天然記念物となっている。東ヌプカウシ山周辺の風穴地帯は、これらに比

べて遜色がなく、またこれらとは異なる地域特性も明確なので、特別保護地区および天然記念物に指定されて当然の価値を有している。

4 大雪山国立公園は日本最大の原始的自然環境を擁しており「世界遺産」の候補として最適の条件を備えていること

日本の国立公園の「生みの親」「育ての親」として高名な田村剛博士は、大雪山国立公園の特質について、1963年時点で次のように指摘している。「大雪山国立公園はわが国立公園のうちで、最も大きく、また最も原始的な景観をもち、世界的に理解されている国立公園というものに最もよくあてはまる自然公園であり、自然保護区である。その面積232千㊦といえ、欧州各国の国立公園でこれに匹敵するものはなく、…しかもその大部分が国有林で占められ、私有地はない。…このようにして、この国立公園は、わが北地景観を代表して優れ、国立公園の世界的基準に照らして堂々たる存在であり、その殆ど全域がそのままに自然保護区に該当し、しかもこれを保存するにも、都合のよい条件に恵まれているので…」(大雪山火山群の研究、日本自然保護協会、1963)

大雪山国立公園は日本の国立公園のうちもっとも自然保護を重視すべきであるという特質は、基本的には今日まで変わらずに継承されている。21世紀に向けて、日本が未来の世代に引き継ぐべき自然環境の「世界遺産」として、大雪山国立公園は、規模、原始性、自然の特異性、土地所有、核地帯と緩衝地帯の配分、法的保護などの観点から、最適の条件を充たす国立公園である。

(付記)

本年に入り、北海道知事は「時のアセスメント」(時代の変化を踏まえた施策の再評価)という新しい施策を打ち出し、士幌高原道路もその対象とすることを道庁内部で意志決定しましたが、公式には発表できず後退しています。しかし、「時のアセスメント」は「始まったら止められない」という公共事業の硬直性が指摘されるなか、画期的なものとして各方面から称賛と期待をもって注目されています(資料2参照)。したがって北海道に対しては、士幌高原道路を確実にその対象とし、情報公開と住民参加を伴って「時のアセスメント」することを要望し、環境庁に対しては、「時のアセスメント」のような制度を全国に広めるため、各都府県を指導されるよう、併せて要望いたします。

さらにまた環境庁に対しては、私たち3団体が、1995年3月25日づけで環境庁長官に提出した「大雪山国立公園計画における士幌高原道路の取扱いに関する質問状」の回答が未だないので、回答されるよう再要望いたします。(この問題は公園計画などの基本問題にかかわるので、時間が遅れても無意味とはなっておらず、回答をお待ちしています。)

トンネル坑口予定地で ナキウサギの糞穴確認

帯広土現と自然保護協会が視察

土幌高原道路問題

帯畜大の
小野山助教授

建設中止重ねて要請へ



【鹿追】土幌高原道路(道)を建設した。新たに、ナキウサギの糞穴やふんも確認されたため、同助教授は、近く地知事、環境庁長官へ報告書とともに建設計画中止を求める文書を出す意向。今回の視察は、同助教授が昨年十一月に食痕を確認したナキウサギの食痕など

に、道が「斜面では確認されにくい」と回答したことから、雪解けを待つ実施された。この日は、同助教授と川会長、帯広土現側の阿部志郎企画調整室長ら六人も参加。小野山助教授が斜面の食痕などを説明した。さらに同助教授らが今月二十日に確認した、トンネル坑口予定地近くの二つの糞穴も案内。中から古いものから比較的新しいものまで計十三個のふん、貯食されたえさのマイソルソウも二つ見つかった。

小野山助教授は「これは予定地周辺がナキウサギの生息地であることの確実な証拠」とし、及川会長も「協会としても道に建設にかかわる調査中止などを申し入れた」と強調。これに対して阿部室長は「六月に実施予定の生態調査の範囲を広げると検討したい」としている。

のため、雪解けを待つて行われた。帯広土現からは阿部志郎企画調整室長ら六人が参加した。

調査では、小野山助教授が発見したツツジ科の低木の食痕三カ所のほか、ナキウサギが入り込んでいると思われる二つの穴で貯蔵のマイソルソウ二つ、ふん八個を確認した。

この日の調査結果を受けて帯広土現は「食痕などがナキウサギのものであるかを含め専門家の意見を聞いて検討したい」と述べた。

土幌高原道路 坑口予定地近くに ナキウサギ生息か 現地調査で食痕を確認

【鹿追】帯畜大の小野山助教授(動物生態学)と十勝自然保護協会及川裕会長、帯広土現は二十八日、土幌高原道路(道)土幌別荘跡の十勝管内鹿追町側トンネル坑口予定地で現地調査を行い、道路の法(のり)面でナキウサギの食痕(しよこん)えさを食べた跡を確認した。帯広土現はこれまで、法面はナキウサギの生息地に含まれていないとの見解をとっていた。



小野山助教授(手前)からナキウサギの食痕の説明を受ける帯広土現の職員

調査は、小野山助教授が昨年十一月三十日で行った公開質問の事実関係確認